# 天壌穿つ神魔の剣

テンジョウウガツシンマノケン

高木幸一

illustration 狐印

GA文庫

アーク・リガード
千魔斬（サウザンド）の異名を持つ魔剣士の傭兵。
ルガイア
人格のある呪われた剣。アークと会話ができる。
リリア・シャイナス
神族の血を引く神術士。マナラン王国の『光の術士団（スライトオン）』所属。
ミレイ・ヴィルラー
フォーズ王国の『天の術士会（ソーン）』に所属の召喚士。
ヒューズ・アートマン
アークのライバルを自称する、魔法剣士。
ティア・バーレン
フォーズ王国の聖槍士。
タル・ターレ
魔族の青年。
フズ・マケット
不死の竜の情報を持つ神族の老人。

# プロローグ ―喋る剣と最強の傭兵(マーセナリー)―

傭兵(マーセナリー)――。これを生業(なりわい)とする者には、三通りの経緯(いきさつ)がある。

ひとつは定職にあぶれた場合。騎士として仕官できなかった者や、家を継げなかった商人、職人らの子、没落貴族、他国の農地から逃げ出した元農民などもいる。傭兵は出自を問われない。必要なのは腕……というより、その命だからだ。

傭兵(マーセナリー)に一騎当千の強者(つわもの)であることなど、雇用者の大勢は期待しておらず、なにより死をおそれぬ肉塊であることこそが、彼らの最も欲するところであった。

もうひとつは、定職に就きたくない場合。国や貴族、商人職人、あるいはどこかの金持ちなんぞに生涯尽くすことなど、まっぴらごめんという輩(やから)は少なくない。国から国へ、街から街へ、風に吹かれる雲のように自由に生きたい。誰(だれ)にも従いたくない。たとえあすをも知れぬとも。そういう者は珍しくなかった。

そして最後に、望んでその道を選んだ場合。これは――。

◇

【……集中力。切れていますよ。貴方らしくもない】

俺の思考を外へ押し出すように、頭の奥からウィスパーボイスが聞こえてくる。なのでちいさくため息をつき、わずかに、背に負う長剣へ目を走らせるとつぶやいた。

「らしい……？　お前が俺のなにを知っている」

【……戦いにおいては、極めて単純になれるところ。なかなか教養はあるけれど、笑いのセンスがいまいち。味にうるさいくせに、料理は下手。他にも色々。……でも長くなるから、この辺でやめておきましょう】

「……。……俺もお前について知っていることがあるが、聞きたいか？」

【いえ結構。愛に満ちた言葉は今、ふさわしくないですから】

俺は思わず顔をしかめ、ささやき声の主である、ぼろぼろの長剣に再度、視線をやってから鼻で笑う。しかしくだんの剣は、そんな侮蔑の態度にも気にすることはない。自分が俺に嫌われていることなど、出会った頃から承知なのだから。つまりこれは、ヤツ流の皮肉を含んだジョークである。

それを裏付けるように、喋る剣――ルガイアは、かすかに笑う。その後、言った。

【……ま。好き合うだけが、続く関係のすべてではありませんし、ね。ともかく日も落ちま



した。私が望んだことではないですが、なるべく早くあれを始末して、いつも通り、『いいお茶のひととき』を提供して欲しいところです。――契約者】

不愉快な言葉が脳内に響き渡る。俺はその残響を打ち消すように、かぶりを振る。そして数十歩先――、幾重にも重なった牙をむき出しにし、こちらへ殺気を飛ばす一匹の白竜を見やった。

◇

星を食らいそうなほど伸びた首、ぎらぎらした目に牙。大魚と見まごうばかりの長く太い尾。そして巨木のような胴と四つ足を持つ。……翼と、なぜか鱗がない、が……。このマナラン南部のような深い森では、大まかなタイプとしてはよく見かけるものだ。

ヤツは自慢の四つ足で、濡れそぼった枯れ草を踏みつけて、己に比し、取るに足らない生き物である俺を見る。出会った直後、かの咆哮で辺りの獣は逃げ去った。

今、この枯れ木に満ちた深い森で、月明かりが映し出すのは、世にも珍しい喋る長剣を背負う、すすけたマントに身を包んだ俺と、白竜と……、俺の後ろで尻もちをつき、怯えて震える、幼い銀髪の少女だけだった。

【――アーク・リガード。すみません、やはりもうひとつだけ。この機会にいい加減、意見

しておきたいことがあります】

再びウィスパーボイスが響く。ちなみにコイツの声は、あることを交わして以来、俺にだけ聞こえるようになっている。……親切なこった。

俺は頭をかき、ひとりぶつぶつ言う危ない男と少女に思われぬよう、小声で返した。

「なんだ。さっさとしろ。あのよだれが見えないか？　お前に『いいお茶のひととき』を提供する前に、ヤツに『いい飯のひととき』をくれてやることになる」

ルガイアは、【貴方のジョークは、ほんとうにつまらないですね……】と冷ややかに言ってから、続けた。

【……。私の記憶が確かならば、貴方は常日頃、『俺は傭兵だ。金のために剣を振るうんだ』と、話していたように思うのですが。この子を助けても、一ブールにもなりませんよ】

俺は顔をしかめ、黙る。ルガイアは、そんなさまをじっと観察するように間を置いて、いつもは高めのウィスパーボイスを低く響かせると、さらに言葉を放った。

【今回だけじゃありません。出会ってから二年、今までに何度、無料で剣を振るいましたか？　……ああ、普段のが建て前であることは分かっているので、釈明は不要です。私が言いたいのは、もうこういうことには……】

「……。……た……」

【……？　……た？】



唇をかんだあと、苦々しく言葉を放つ。

「……無……料で仕事を引き受けない、という意味だ、いつも言ってるのは。……そしてこれは無料仕事じゃなく、俺が好きでやってることだ。矛盾などしていない。プライベートでなにをしようが、勝手だろうが……」

【……】

ルガイアは、しばらく沈黙した。が、その後、【……は……】と、いつもとは違った声を出し、それから爆笑した。

【……はははははははっ！　これは面白い！　初めて貴方のジョークで笑いました……。なるほど。そう……。……ところで】

ひと呼吸おいて、言った。

【こう四六時中一緒に過ごしていると、悪態とは裏腹に、ビジネス・プライベートタイム共々、なるべく私を振るい、ひとつになっていたい……という気持ちも貴方には、多分にあると思っていいのですか？】

「――なんだその解釈は⁉　ふざけるなっ！　……そもそも離れられないだろうがっ‼」

反射的に怒鳴りつける。が、すぐ我に返って、少女が目を見開きこちらを凝視しているさまに顔をしかめた。……しまった。

俺はおおきく咳払いし、「……あっ！　あの白竜がぁ～っ！　ふざけていられるのも

今のうちだぞっ!!」とごまかすように何度か指差してから、深呼吸。そして平静を取り戻し、鞘ヒモをたぐり寄せ、柄を顔の横へ引き出すと、一気にお喋り剣を抜き取った。

月光で照らし出された両刃剣の剣身は、無数の傷がつき、平らなところはどこもない。それどころか、左右の刃が大小合わせて計六箇所、欠け落ちているという風通しのよさだ。

また、柄もつばも色がはげて黒みがかり、かつて華やかだったろう装飾は、今はもう、そのわずかな面影と、長い年月を経て得た荘厳さを残すのみだった。

ゆえに美術商ならばともかく、これを武器屋に売ろうものなら、即、店の親父に叩き出されること請け合いの、ありていに言ってがらくたに近い代物である。

しかし俺は、コイツを手放せない。捨てることも、別の剣に持ち替えることも。……呪われているからだ。

◇

「――小放」

俺はルガイアを構えたまま、ちいさく言った。刹那、俺の右目は青白く光り、その輝きは間を置かず、薄い膜を張るように、全身を仄かに包み込む。そして、ルガイアにも伸びてゆく。

この光は汐と呼ばれる、身体・武器能力を強化する、ほぼすべての戦士が身につけている

力だ。

汐にも色々あり、それぞれ名前も色も違う。魔族の血を引く人間である俺の場合、魔汐（ましき）といい、輝きは青白い。……はっきり言って、口だけは達者なこのルガイアは、魔汐がなければ単なる朽（く）ちかけた金属棒であり、武器としての役割をなにも果たしていない。

光をまとうルガイアは、いまだに【く……。くく】と笑みを漏（も）らしていたが、俺が柄を強く握り込むと、【……ああ、はい。しました理解は。いちおう。……ぷっ】と半笑いでいい加減に返してから、咳払いで平静に戻る。そして、しずかに続けた。

【……しかし、どうあれ私としては、もう極力、関係のないやっかいごとに首を突っ込むのはやめて欲しいのですよ。……いかに貴方が千魔斬（サウザンド）と呼ばれるような強者であっても、不死ではない限り、どんな相手にだって遅れを取ることもあり得るし、関（かか）わったことで、怪我（けが）や病気に見舞われる可能性も高まるし……】

「……なにが言いたい」

ルガイアは、わずかに間を置いてから言った。

【つまり、途中で死んではお互い、目的が果たせない、ということです。それは困るでしょ……】

「……決して油断せず、しかしいつものように振る舞うんだ。――行け（ドゥ・ヴェスタ）」



俺はルガイアの台詞（せりふ）を断ち切って、傭兵（マーセナリー）になって以来唱えているまじない言葉をひとりごちると、マントをなびかせ一直線に白竜（ホワイトドラゴン）へと飛び出した。

青白い光塊（こうかい）が過ぎるたび、地の枯れ草は波立つように騒ぎ、落ち葉は飛び散り、切り裂かれた風とまざって鈍い音を立てる。白竜（ホワイトドラゴン）は、そんな地を這（は）う流星を認めてすぐ、大口を開けて炎をはき出すが、俺は突進したままひと振りでかき消した。

「ヴォオオオオ……！」

炎を斬（き）り裂き、視界が開けたその先で、獣を蹴（け）散らしたかの咆哮（ほうこう）が再び響き渡る。血液まで震わせる震動にも、俺は体（たい）を崩さずまばたきせず、さらに突っ込み前足めがけて斬りかかる。しかし、白竜（ホワイトドラゴン）は瞬時に体をひねってそれをかわし、長い尾をこちらへ向かって叩きつけた。

「……っ！」

とっさにルガイアで防ぐが、おおきく後方へ吹っ飛ばされた俺は、枯れ木に三度ぶつかってようやく止まる。背を打ち付けた痛みでむせ、切れた唇をぬぐってから顔を上げると、炎塊（えんかい）がこちらへ向かってきていた。――くそったれ！

「――半放（ルーフィアス）！」

叫んだ瞬間、俺の両眼は青白く発光、全身を覆（おお）う輝く膜が厚くなり、不規則な点滅を始める。俺は点滅する光に包まれたルガイアを片手で振り上げ、炎塊を斬り飛ばす。まっぷたつ

になったそれは、それぞれ空で飛散し、火の雨となって辺りの枯れ木を盛大に燃やし始めた。

【貴方は森を燃やしたいのですか？　……ああ、もうこの辺りでは休息できない。また歩かねばならない……】

「――やかましい！　俺は被害者なんだよ！　……あと歩くのは俺だ!!」

俺はルガイアを怒鳴りつけてから、少女を探すが、火からは離れていたので安堵し、「小放」と唱えて輝く膜を薄くしたあと、白竜へ目を向ける。

ヤツは低く唸り、燃えさかる辺りを見まわしていた。四つ足はどっしりと地を踏みしめ、こちらへ近づいてこようという気配もない。俺を警戒しているのか、単に離れて殺すと決めたのか。……どうする。

【短期決戦を希望します。きょうは一度も『いいお茶のひととき』がなかったから、そろそろほんとうにえないじいが尽きますので】

……。毎日毎日……。だいたい剣のくせに、茶を飲んだり菓子を食う必要があるのか？という疑問はさておき、やっかいなことに、コイツのえないじいが尽きると、尋常でない重さになるのだ。そうなると、とても戦えたものではないし、移動するのもひと苦労だから……癪だが早々に決着をつけるしかない。

「……半放！」

俺は再び両眼を青白く光らせ、全身を覆う輝く膜を厚くして、不規則に点滅させる。魔汐



に限らず、汐の放出には三段階あり、これは半分放出するものだ。……放出すればするほど、攻防の力は増してゆくが、早く汐が尽きる。尽きてしまえば、一定時間休息しない限り、それが戻ることはない。

汐を武の源とする多くの戦士にとって、それが尽きるということは、現世の戦場において、即・死を意味する。ゆえに状況に応じて、量を調節する必要があるのだ。

俺はルガイアを地と水平に構えた。そして、

「壊光円」

そう、言葉を放つと、波が打ち寄せるような音を立て、全身の光が、すべてルガイアに収束してゆく。やがてそれは剣先に集まると、おおきな光の輪を作り出した。

「――ヴォオオオオオ！」

白竜は、その輪を認めた瞬間に咆哮し、すぐまた、喉の奥に炎塊をたくわえ始める。それがヤツの口を満たす直前――俺は水平に構えたルガイアをおおきく後ろに引くと、一気に前へと振り抜いた。

光の輪は一直線に白竜へ飛び、炎塊をはき出すひまを与えず、その長い首をはね飛ばした。

# 第1章 ―欠片のゆくえ―

俺は数十歩先に転がる巨体と、そばの長首を見つめ、訝しがる。……血が出ていない。

【……まだ生きている可能性は？】

「ない。気配が感じられん」

周囲に視線をやると、燃えさかっていた炎がいつの間にか消えている。残り火がない。明らかに自然鎮火ではなかった。白竜が倒れたことと、関係していると見るのが妥当だろう。と、いうことは……。

俺は青白く輝いた、不規則な点滅を湛えたまま、ルガイアを収めずに、横たわる白竜へと近づいた。が、数歩手前まで来た時、巨体と首は白く発光すると、そのまま霧のように消えた。

「……やはり幻術の類……――術士は！」

すぐさま辺りを見まわし、警戒するが誰もいない。……待て、誰もいないだと？

「幻術じゃないわ。……手応えがあったでしょう？」

俺は声がした後方を見ずに、そのまま前へ飛ぶと、着地と同時に振り返り、ルガイアを構える。すると先ほどまで身を屈め、怯え震えていた銀髪の少女が、背筋を伸ばして屹立していた。闇夜の中、驚くほど冷淡な目でこちらを見つめている。

「……あなたの生まれは西の大陸・ハーバルに位置する、サバラ王国の第三地区、ティクソン」

少女はしずかに言葉を放ち、俺を指差す。

俺が瞬くと、わずかに口の端を上げ、突き出した指をゆっくりと引っ込め、後ろ手を組む。そして横を向き、フリルの白いワンピースを揺らしつつ、赤い靴で一歩、また一歩と辺りを歩き出した。

「両親ともに人間だけど、先祖に魔族を持ち、その血を引く家系。十三歳で傭兵になって以来、今までに魔物を千体、独力で斬り伏せたことから、千魔斬の異名を持つ魔剣士。……漆黒の髪、鋭い眼光、鋼のような肉体と、質・量ともに並外れた魔汐。その圧倒的な強さにより、現在、若くしてアス・バルク最強とも言われている男」

足を止め、こちらを見やる。「――アーク・リガード。歳は十九。……間違いないかしら」

「……ある。買いかぶりすぎだ」

俺は、白竜が消えたあとを横目で見る。すると少女は、「いいえ。今まで白竜を倒した剣士など、ただのひとりもいないもの。しかも、あなたはまったく全力を出していない。……でしょう？」とこちらを見据える。

「……それはお互いさまだろう」
少女はふふん、と得意げに笑う。その時にはもう、冷淡なまなざしはなく、少女のそれになっていた。それで俺はルガイアを収め、全身から光を消した。
「お前は、マナランの使者だな。……さっきのはなんだ」
「王の命でね。ちょっとした試験をさせてもらったわ。あなたがほんとうに噂通りの腕前か、雇用者としては、気になるんでしょうよ」
「そんなことはもう分かっている。まだ、正式に雇われたわけじゃないからな」
今から二週間前――。ここから南へ、馬で五日ほどの街、シージールに滞在していた時。俺は酒場で、マナラン王国の使者から仕事を持ちかけられた。……なにやらおおきな仕事であることと、報酬の多さ、そして個人的な用もあって引き受けたが、具体的な内容をいっさい話さなかったことといい、訳ありのヤマであるに違いない。このくらいの値踏みはするだろう。
俺はこちらの様子をうかがう少女に、別に気分など害していない、という意味でかぶりを振り、「俺が聞きたいのは、白竜のことだ」と言って、続けた。
「幻術じゃないとしたら、なんだ。召喚術でもない。あれは召喚獣の消え方ではない」
「――神術」
「……神術？　馬鹿な……」



俺は苦笑した。神術は、神族か、その血を引く人間のみがなれる職のひとつ――神術士が扱う術で、とうぜん知ってはいる。昔戦ったこともある。が、その術はおよそ魔術と同じで、火・水・風・土・雷……を基本とした、現世にある実体に呼びかけて操るものである。……ゼロから創造するタイプに出会ったのは、初めてだ。
「まあ、生き物……、特に竜を創り出せるのは、いないかもね。うちでも私が初めてだって聞いてるし」
少女は、銀髪に手を入れると軽くすき、それを風で遊ばせてから、こちらを見る。俺はちいさく息をはき、言った。
「まだ十歳かそこらに見えるが、大した腕前だな。マナランの神術士でそれほどならば……、シャイナス家の人間か」
「――ヴィ・マールディ！　キミ、なかなかの慧眼だわ！」
少女は満面の笑みで俺を指差した。俺が、やや呆気に取られてぽかん、とすると、「あっ……、し、失礼っ！　そ、それと今のは古代神語で『すばらしい！』という意味ね⁉」と慌てて話し、顔を赤らめたあと、「ふー……」と胸を押さえつつ息をはき、言った。
「私の名はリリア・シャイナス。シャイナス家の現当主、そしてマナラン王国『光の術士団』の術士長を務めるタンドラー・シャイナスの娘よ。人間だけど、ご先祖様が神族で、その血を引いていて、家は代々神術士をしているわ。……私も二年前に学校を卒業して、今は

『光の術士団』に所属しているの。――アラレスタ、ロロ・リガード」

シャイナスは、胸の前で両手の指先だけ合わせ、三角形を作ると、目を閉じて片足を前に出し、腰を落とす。……アラレスタは現代魔語で「よろしく」、ロロも同語で男への敬称。そしてこの礼も、魔族や、その血を引く人間ならよく知る、魔族伝統の挨拶だ。……さっき古代神語がとっさに出たことといい……。なるほどな。

俺は目を開けたシャイナスに、何度かうなずくと、しずかに言った。

「ラ・ヒュール、レポルタ」「パーダヴァ・トゥブ・ルーディブル」

まず現代神語、次に古代神語で返答、それから両手を胸の前で組み、手のひらのほうをシャイナスに向けると、目を見たまま片足を引き、腰を落とす。これは神族や、その血を引く人間ならよく知る、神族伝統の挨拶。つまり、俺なりの返礼をしたわけである。

「……えっ？　な、なんで？　今の……」

口をぱくぱくさせるシャイナスに、俺は淡々と言葉をつむいだ。

「傭兵には、独力でなったわけじゃない。十歳から十三歳までの三年間、ある剣士に師事し、師匠から剣術・体術と一緒に、語学や民族学を学んだんだ。仕事で関わる相手は、多国籍・多民族にわたるからな。……ま、それと関係なく、他にも色々、教えは受けたが……」

弟子入り後、初めて受けた授業を思い出し、俺は顔をゆがめる。



――ヒュームとタタンを隔てる、標高千三百三十三ペセル（※一ペセルは剣ひと振りほどの長さ）の山はなんだと思う、アーク？――

――わ、分かりません。教えて下さい――

――駄目だよ、簡単に頼っちゃあ……。今から行って、じっさいに見て、名や歴史は現地の人に教えてもらいなさい。礼儀は忘れずに。それと、ちゃんと頂上まで登るんだよ――

――あの……。ヒ、ヒュームは、ここから二千五百ポン（※約二万五千ペセル）もあるんですが……――

――馬に乗れば、すぐだよ。貸してあげよう――

――乗ったことありません――

――覚えなさい。馬は逃がさないように――

……きょうも誰かが、あの人の実践的スパルタ教育の餌食になってるのか。心から同情する。嫌な汗をぬぐった時、シャイナスの視線に気づき、俺はごほんごほん！　と気を取り直し、続けた。

「……知っての通り、このアス・バルクには人間・魔族・神族と、俺たちのように、それらの血を引く者が生活している。人間の多い地区を嫌って、民族自治区に住む純粋魔族・神族たちは、人語を解さない者も多いが、この稼業で広く活動し、長く生きるつもりなら、彼ら

と会話もできない、文字も読めないじゃ話にならんだろう。だから現代語、古語ともに神魔族の言語は、師匠の授業と、その後自分で、ある程度修得している。……まあ、日常会話と、専門書以外の本なら読める、そこそこ書けるくらいだけどな」

「……へぇー……。そうなんだあ……」

いつの間にか至近距離にシャイナスがいて、下からのぞき込んでいた。心なしか目がきらきらと輝いて、口の端が上がっている。……な、なんだ？

「ね、ねね。歴史学は？　地理学は？　天文学に生物学、植物学は？　知ってる？　勉強した？」

「あ、ああ……。ひと通りは。さっきも言ったように、学校に通ったわけじゃなく、個人的に授業を受けたから、偏（かたよ）っているとは思うが。礼儀作法を含め、基礎教養は、傭兵（マーセナリー）稼業だけでなく、生きる上で必要となる……と。師匠から」

「――ヴィ・マールディ！　すばらしいお師匠様ね！　きっとあなたのことをすごく親身に考えて下さったのだわ。うん、うん。……色々あなたのことは聞いていたのだけど、直接話してみるものね。やっぱり私の想像していた通りだわ……」

「……。色々とは、マナラン王からか。それと、なにを想像していたんだ？」

「えっ？　う、うんっ。王もだけど……ずっと前から、あちこちで。あなた、有名人じゃない。――あ、さ、ささささ最後のは気にしないでっ!?」



真っ赤（まか）になり、慌ててぶんぶん両手を振ると、幼い顔をほころばせる。なんだかよく分からないが、楽しそうにしていた。そんな様子に戸惑い頬（ほお）をかく俺に、シャイナスは笑みを湛えたまま、ゆっくりと手を差し出した。

「握手……、してもらっても？」

「……。ああ」

俺はシャイナスの手を取る。すると、そのちいさな手から漏（も）れる、わずかな神力（じんりょく）の、ぴりぴりとした痛みが手のひらに突き刺さった。

向こうも俺の魔汐を感じ取ったらしく、やや顔をしかめた。しかし笑みは絶やさずゆっくりと、重ねた手を上下に動かす。……魔族と神族、あるいはその血を引く人間同士は、力が反発し合うのだ。それを分かっていて、友好の証（あかし）として、握手を求めたのだろう。……まあ、悪い気はしない。

握手を終えたあと、シャイナスはしびれを取るために、手を閉じたり握ったりしていた。その様子を見ながら、俺はしずかに尋ねた。

「さっき、今は『光の術士団（ブライトネス）』に所属していると話していたが。今回のことといい、もう実戦に出ているのか」

「ええ、まだたった九回だけどね。父がうるさ……じゃなく、シャイナス術士長が、あれこれ厳しくて。今回の任務で、やっとふたけた。これも説得するのにとても時間がかかっ

て……」

しびれの取れた手と、もういっぽうも広げ数を示し、苦笑する。俺は訝しがった。

「任命されたのではなく、名乗り出たのか？　なぜこんな仕事を」

「――っ！　し、しまっ……！」

あたふたと、また赤い顔で両手を振る。そして必死に、「わ、忘れて忘れてーっ！　ほらほらあなたは忘れる忘れる、わすれ～るぅ……」と、左右にゆらゆら、妙な動きを始めたので、俺は、「ぶっ！」と噴き出した。

「な、なんだお前は……！　ははは っ！　おかしなヤツだな……」

笑い出すと、「なっ⁉　なななにがおかしいのっ⁉　私は真面目に言ってるのよ！」とさらに顔を赤くして怒り出した。術はすごいが、やはり中身は見たまま子供だな。

「……！　今、子供っぽいと思わなかった⁉　年上だからって……！　言っておきますけど、私は早生まれ！　つまり学年は同じなのっ！」

「……？　どういう意味だ」

シャイナスは、怪訝な顔をする俺に、「どうって、もしあなたが私と同じように術士学校で時を過ごしていたら、同級生だということよ！　……ああもう、だからやっぱりキミって言うわ！」

眉をひそめ、「キミ！　今からあなたはキミ！」と何度もこちらを指差した。それでます



ます不可解になる。コイツはなにを言ってるんだ？

「おい。お前が何月生まれだろうが、俺と学年が同じになるわけがないだろう。俺は十九だぞ？　お前はどう見たって……」

「なるわよ！　……私は十八歳だもの！」

シャイナスは、への字口で腕組みする。俺は苦笑しながら、聞き返した。

「……。今なんて言った。……十八？」

「そうよ。あな……キミの一個下！」

唇を尖らせて、強く返す。……俺の胸くらいしかない背丈、棒のような手足、ヒザ上の、フリルのたくさんついた、子供が喜んで着そうな白いワンピースに、真っ赤な靴。肩ほどの銀髪と、同じく銀の両眼は大人びた雰囲気があるが……。ない。ありえない。

俺が信じられん、というようにちいさくかぶりを振っていると、シャイナスはおおきな目をぱちくりさせてから、とつぜん、

「……――あっ！　ご、ごめん！　元に戻るの忘れてた！」

と、言った。

「戻る？　……って、まさか」

「そう。これも神術のひとつで……肉体を変形させるものよ。こういうのは魔術士のほうが、得意と思うのだけど。――元に戻れ」

シャイナスがつぶやくと、その人形のような体が白く発光し、輝きの中で少しずつ、形を変えてゆく。棒のような手足が伸び、胸や腰まわりが豊かさを増し、大人びた線を描き始める。

やがて光が収束し、夜の闇が戻った頃――。目の前には、俺の鼻辺りまで伸びた背に、おおきな胸、それに比して細くしまったウエスト、肉付きのいい腰まわりに長い脚……といった見事な肢体を持ち、妖艶な輝きを放つ女が、ピンクの唇を固く閉じて佇んでいた。

「……。なるほど、な」

思わず漏らすと、シャイナスは肩ほどの銀髪を揺らして体を抱き、「うっ……」と顔を赤くして一歩下がる。なので、「別に変な意味じゃない」と視線を外した。

シャイナスはちいさな声で、「と、ともかくこの通り、子供じゃないよ。ちゃんと大人だから……」とつぶやいた。

しばらく、一定の距離を置いてふたりで向き合っていたが、妙な空気になってきたので、俺は息をはいて言った。

「……で。俺は王に謁見できるのか。白竜は倒したが。他にもなにか、試験は」

「えっ？　な、ないないない!!　――合格！　絶対合格っ！」

シャイナスは、指を突き出して叫ぶと、深呼吸し、胸を押さえる。それから、やや長い爪



の先を白く光らせ、空に現代神語を書き出した。――リ・パーショ！――、と。

「そういうことで、アーク・リガード！　あすの晩、キミをマナラン王宮へと招待し、王より正式に仕事を依頼します。今から飛竜で城下街のウェザーまで運んであげる。宿も手配してあるから、長旅の疲れをゆっくり癒してね！」

シャイナスは微笑んだあと、ひらり、短くなったワンピースの裾をまわして背を向ける。……と、いうことは、野宿しないでいいということか。正直、また歩かなきゃならないのかとうんざりしていたから、助かった。

俺は息をつき、背中のルガイアに目を走らせる。いつもなら、俺にしか声が届かないのをいいことに、ひとことくらい口を挟んでくるんだが、黙ったままだな。重さは変わってないから、えなじいが尽きたわけじゃなさそうだし。……疲れたか。

首を傾げつつ、飛竜を創り出すために詠唱しているシャイナスへ目を向ける。段々と白い光が竜の形を描き出していた。ほんとうに、命が生まれ出づるようだ。

俺は、その見事な術に感嘆し、ちいさく口笛を鳴らす。――が、直後、地面に転がる子供用の赤い靴と、シャイナスの後ろ姿を見て、今頃あることに気づいて苦笑した。

いっぽうシャイナスはなにも気づかず、裸足のまま、飛竜を創り出すことに集中している。……終わってから、声をかけるか。

横を向き、待っていると、やがてシャイナスが、「よおし、できた！」と手を叩いたので、俺は振り向く。するとそこには、熊二頭ほどのおおきさで四つ足の、鱗のない、巨大な翼が生えた白い飛竜が現れていた。

「あとは手綱ね。……無機物は、創り出せないんだよね」

そう、ぱさぱさ枯れ草を踏みつけて、裸足で枯れ木のほうへ駆けてゆく。しばらくのち、色とりどりの、花の刺繍がたくさん入った帆布鞄を肩にかけて戻ってきた。

「そういえば、怪我してない？　魔剣士は神術士の回復術を受けつけないから、かけられないけど……。ちょっとした痛み止めとか、包帯なら持ってきてるわよ」

と、言って鞄を探り出したので、俺はすぐ、「いや、大丈夫だ」とかぶりを振る。そしてマントを脱ぐと、ゆっくりとシャイナスの肩にかけ、体を包み込んだ。

「……？　ど、どうしたの？」

表情を硬くして、ぎこちない笑みを浮かべるシャイナス。俺は再度、苦笑して、そばに転がる赤い靴を指差した。

「……。え？　……。……えっ？」

シャイナスは、サイズが合わなくなって自然に脱げた靴と、自分のむき出しの足を交互に見やり、少しずつ震えを増してゆく。それでぐるぐる視線をまわしながら、歯をかちかち鳴らし、風でひらりとめくれたマントの下に一瞬のぞいた――おおきくなったため、はっ

きり体のラインが出て、丈が足りずに下着のあらわになったさま――を認めた瞬間、見るも哀れなほどに表情を崩していった。

「……あの、アーク・リガード。……。……見、……た？」

「……。知らん」

「そんなはずない。だって無防備に詠唱してたし……。後ろに立ってたじゃない。ずっと、じっと、……見てたんでしょ？」

「横を向いていた」

「……それを証明するものは？」

「……。ない」

「――ひいいいいいいいいいいいいいいいっ!!」

とつぜん、魔物のような声を上げて座り込み、真っ赤になって涙を流し始めた。俺が近づこうとすると、低い姿勢のまま飛びのいて、そのままジャンプをくりかえし、ばっさばっさとマントを揺らして遠くへ逃げる。そして枯れ木に身を隠し、涙まみれの顔だけ出すと思いきり叫んだ。

「なっ……！　なななななんでもっと早く言ってくれないのっ!!　ばばばばば馬鹿にしてたでしょう！」



「してない。替えの服は持ってきてないのか？」

俺はため息をつき、枯れ草の上に落ちている帆布鞄に目をやる。すると猛スピードで戻ってきて、鞄を拾い上げると鎮座する飛竜（フライドラゴン）の後ろに身を隠した。

「ないの！　つい元に戻っちゃったけど、そのつもりなかったし！　あああうううう……、見られた……。なんてことなの……」

おーいおいと泣き続け、飛竜（フライドラゴン）の背に顔をうずめる。飛竜（フライドラゴン）はあくびをしていた。俺は頭をかきながら、かける言葉を探すこと数十秒、なんとか笑みを浮かべつつ、言った。

「ところで、その服。お前の子供の頃のか？　なかなか可愛（かわい）いじゃないか。そういうの、好きだったのか？」

「……。……うん」

ゆっくり顔を上げ、真っ赤な目でこちらを見て、うなずく。俺が、「靴も可愛いな」と続けると、シャイナスは目をごしごしやり、「……お気に入りだったの」とつぶやき、そろそろ靴に近づく。そして拾い上げて、ていねいに汚れを払ったあと、鞄にしまった。

「……ごめんなさい。悪いのは私だわ。あまりに恥ずかしくて……」

ちいさく頭を下げ、マントを巻きつけたまま、俺をのぞき込むように見る。なので首を振り、「こちらこそ。早く気づくべきだった」と、謝った。

シャイナスははにかみ、同じように首を振る。そしてもじもじマントを押さえつつ、言った。

「あの……。手綱を取りつけてくれない？　私はこんなだから……」
「ああ。ところで……」
「……なに？」
「コイツに俺は、乗れるのか？」
俺は飛竜（フライドラゴン）を見やる。神術で創り出したのなら、全身、神力を帯びているだろう。多少のしびれなら、我慢しないこともないが……。
「大丈夫、大丈夫。この子を生み出したのは神力だけれど、それではできていないから。ふつうの飛竜（フライドラゴン）と同じなの。鱗がない以外はね」
シャイナスは、笑顔で言った。それならと、鞄から取り出した手綱を受け取り、俺は飛竜（フライドラゴン）にぽんぽんと、軽く触れてみる。……確かにしびれない。
装着し始めると、飛竜（フライドラゴン）は従順で、手綱をつけやすいように頭や体を動かしさえした。……白竜（ホワイトドラゴン）もそうだが、コイツらには自我があるのだろうか。本物とほぼ同じであることといい、だとしたら神術以前に、すべての術の中でも、相当に高度なものだぞ。
「どうしたの？」
「……なんでもない。それより、今の、その状態のことだが。また子供の姿になることはできないのか？」
俺は、マントから顔だけ出しているシャイナスへ尋ねる。この飛竜（フライドラゴン）が、どれほどの飛行



能力があるのかは分からんが、俺が乗ったことのあるヤツと大差ないとすれば、森を抜けてウェザーまで行くには、やはりそれなりに時間がかかる。その間、ふたりでコイツに乗るなら、替えの服がない以上、今着ているものがぴったり合うように、戻ったほうがいいだろう。
そんなことを考えていると、シャイナスは苦笑してかぶりを振った。
「白竜（ホワイトドラゴン）や飛竜（フライドラゴン）は、膨大な神力を消費するから……。もうあまり神力が残ってないの。いざという時のためにも、ある程度残しておかないといけないし。……べ、別にマント（これ）があるから！　私は後ろ、キミが手綱を握って⁉」
「分かった。進路の誘導を頼む」
俺は飛竜（フライドラゴン）の首筋をなでたあと、何度か手綱を引き、広い背中を見つめ、どういう姿勢で乗ろうかと思案する。鞍（くら）がない上に、ふたりだからな。
「ね、ねえ……、アーク・リガード。さっきの話。……服のことだけど」
シャイナスが、ぽつりと言った。顔を向けると、仄（ほの）かに頬を赤くして、続ける。
「こういう服って、どう思う？　その……」
「……。可愛いと思うよ。子供らしくてよく似合ってた」
答えて、飛竜（フライドラゴン）の背に飛び乗った。他の飛竜（ヤツ）よりも少し、やわらかいな。しかし、踏ん張りにくいというほどでもない。

そうして感触を確かめつつ、立ったまま右足、左足と重心を変えたり、腰をおろしたり、色々試していると、また下から声がする。

「そ、そうじゃなくて！　た、たとえばの話、……私――……じゃなくて！　私くらいの歳の女が、普段からこういうのを着てたら、どうかなって。――も、もちろんちゃんと、サイズが合ったヤツをよ⁉　キミとしては……」

「……えっ？」

思わず振り向き、見おろす。目が合ったシャイナスは、俺の強ばった表情を見て、「……そ、その顔は、なに？」と、頬をひくひくさせ始める。俺は慌てて言った。

「い、いや！　子供の格好としてはいいと思う、が……」

俺は口を開けたまま、固まった。わずかに場が沈黙する。半眼になったシャイナスは、「……ふーん」と飛竜に寄りかかり、トッ、トッ、トッ……、背を指で叩き始めた。

「今、『ありえない』、とか思ったの？　……そんな女は、『ないな』って」

「……べ、別にそういうふうには……。アス・バルクは広いか……」

と、言いかけて口を閉じるも時すでに遅し、明らかに怒りを充満させたシャイナスは、半笑いのまま、飛竜の尾のほうへ歩き、そこからよじのぼってきた。

そして、マントをかぶった姿で四つん這いになると、魔女のように冷たく笑い、「そうね。アス・バルクは広いものね。どこかにいるかもね。そういう嗜好の女も。……すばらしい



物言いだわ」と顔を引きつらせ、寄ってくる。俺は思わず後ろに手をつき、なんとか言葉を出そうとするが、シャイナスは、それを断ち切るように、

「ところでアーク・リガード。キミは傭兵として、あちこち旅をしていると思うけれど……。人間、魔族、神族、その血を引く者……たくさん女を見てきたでしょう？　で、そんなキミでも本音のところ、こんなのは、なかなかお目にかかれない変な女なんだ……」

と、ますます寄る。俺は身を引きつつ、シャイナスを指差して必死に返した。

「――待て待て！　これはたとえ話だよな？　ならお前が怒る道理はないだろうがっ！」

「い・い・え。大人になっても純な気持ちを忘れない、どこかにいるだろう、汚れなき心を持つ女性のために、私はいち乙女として――無粋な返答をした男に怒らないといけないのよ！　今後、その男が誰かに失言しないようにね……！」

自称乙女は悪魔のような表情で、両手をわっしゃわっしゃさせる。ふたつとも白い光に包まれていた。――お前神力がだだ漏れだぞ！　残り少ないのに無駄なことで使うんじゃねえよ⁉

俺は飛竜へ、助けを求めるように振り向くが、ヤツはこちらを一顧だにせず、枯れ草を食んでいた。……飯まで食うのかよ。ヴィ・マールディ……。

「アーク・リガード！　もうひとつ問いかけるわ！　……もし、そういう女がいたら……、キミは男として、連れ立って食事に出かけたり、買い物へ行きたいと思う⁉　――はっきり

目を見て答えなさいっ!!」
「な……や、ちょっと待てって！　――近い！　その手を近づけるな!!」
おそろしい形相で、俺にとって神の一撃に等しい白い光を輝かせ、触れてこようとする。なので、なんとかヒジの辺りをつかんで止めようと、左右の手を伸ばした。……どこに触れてもしびれはするが、あんなものをくらうより千倍ましだ！
俺は、すばやくシャイナスの攻撃をかいくぐり、隙を見てヒジをつかも……うとしたら、よけられて、
「――っいひっ!?」
別のものをつかんだ。そう、絶対につかんではいけないものを……。

「……あ……、……あ、あ……」
シャイナスは目を見開いて、さいしょ、俺の顔を凝視し、次に、祝祭で売っているぜんまい人形のようにコチ、コチ、コチ……、両手で鷲づかみにされている、己の豊かなふくらみふたつに目を向ける。それからまた、震えながら顔を上げ、俺を見た。……おそらく、というか確実に、魔汐によるしびれで震えているのでは、ない……。
「……じ……、こだ。――事故。これは。そう。……だから」
ゆっくり話し、神力でしびれた手を離し……、少しずつ、少しずつ、体を下げてゆく。し



かし、その哀れで単純な回避行動は、瞬く間に見破られ、俺は真っ赤な顔で涙を流すシャイナスに、
「――いっ!!　やあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ!!」
思いきりマントを叩きつけられ、飛竜から転げ落ちた。
「――変態っ!!　変態変態変態変態変態変態……――変態千魔斬!!」
胸をえぐるような罵声が飛び、視界をふさぐマントをおろすと、涙目のシャイナスがいつの間にか鞄を引っかけ、手綱をにぎり、「飛べ！」と叫んで飛竜がふわりと上昇、段々空へと遠のいてゆくさまが目に入る。声をかける間もなかった。
そうして俺を残し、下着丸出しのまま、子供のような泣き声を響かせて、シャイナスは夜の闇に消えていった。

◇

「……くそ。……なんてこった」

俺はおおきくため息をつき、ヒザにかかったマントを見やる。頭にまだ、「変態千魔斬」の絶叫が響き、しばらく暗い顔で肩を落としていた。

やがてかぶりを振って気を取り直すと、鞘ヒモを解き、ルガイアを鞘から抜く。それを枯れ草の上に置いて投げやりに続けた。

「おい、もうきょうはここで眠るぞ。……歩く気力が果てた」

返事を待たずに立ち上がる。そして白竜と戦う前、枯れ木のそばに置いた荷物を拾いに向かう。水、薬草、保存食、調理道具、替えの衣類にタオルが入った革鞄と、ヤカンに食器、茶器や菓子入りの布袋。そしてもうひとつ、シージールの貸衣装屋で借りた、王に謁見するための礼服一式を詰めた鞄だ。……もしかしたら、もう要らなくなったかもしれないが……。

俺は頭をかいて、空き腹を満たすため、取り出した干し肉をくわえる。そのまま荷物をかつぎ、ルガイアの元へ戻ってくると、適当に石と乾いた枯れ枝を拾い集め、かまどを作り、火を起こす。しばらくして炎が広がったのを見計らい、ヤカンに水を入れ、火にかけたあと、ティオの茶葉が入った小瓶を取り出した。

ティオは、他の茶にはない独特の苦みがあり、主に酒や煙草をよくたしなむ男に飲まれている。クセのある味が好まれているのだが、それ以外にも、香りが強く、よく口に残るため、いわゆるにおい消しのために、女と出かける前に飲まれることが多いというわけだ。



干し肉を呑み込み、ちょっとしたテーブル大の白布を広げ、その上にティーポット、ティーカップ、皿を置く。カップはふたり分。皿には赤、青、黄など、色々なクッキーを五枚並べている。

春にはまだふた月ほどある肌寒い夜、静寂に包まれた暗い森の中で剣と向き合い、『いいお茶のひととき』を楽しまんとする男。正に茶番……人には見られたくない様だが、えなじいが尽きては俺が困るので、付き合うしかない。……ちなみに、ティオもクッキーも俺の趣味じゃない、と付け加えておく。

湯が沸き、ポットやカップを温めてから、ティオの瓶を開ける。いつもならそこで、【たまらない香りですね。誰かの体臭もどこかへ消し飛ぶよう】などと毒をはきながら、その日見聞きしたことを饒舌に語り出すのだが、まだ黙っている。俺は瓶を置いて、声をかけた。

「ルガイア。寝てるのか？　それともふつうの剣として、素直に生きると決心したか」

【その時は、死ぬ時です。……クッキーの並びがずれていますよ、アーク・リガード】

ようやく出てきたウィスパーボイスの、小姑のような駄目出しにも、疲れているので逆らわず、黙って従い、ふたり分の茶を入れる。そして、「【私と貴方に。あすもいい日でありますように】」と、ルガイアが望む言葉を同時に唱えてカップをかかげ、ひと口飲んだ。

それに合わせ、ルガイアの茶も少なくなる。どういう原理か分からんが、俺が飲むたびに、

ヤツの茶も減っていくのだ。ルガイアから飲むことはない。クッキーも同様で、つまり俺が飲み食いを終えない限り、『いいお茶のひととき』は永遠に続くということだ。なんとすばらしいことか。

だるそうな顔をする俺に、ルガイアはしずかに言った。

【さて。きょうはなかなかいい時を過ごしましたが……。雑談は置いて、私からひとつ、貴方に言っておきたいことがあります】

俺は、カップの端をかんだ。そのまま、炎に照らされたルガイアを見やるが、ヤツは俺がカップから口を離してようやく、話を続けた。

【マナランの仕事は断って下さい。貴方には、早急にやるべきことができました】

「……」

カップをかち、かち……二回かんで、布の上に置く。俺はルガイアを見たまま、クッキーに手を伸ばすと、それをもてあそびながら、言った。

「お前にとって、俺にやらせるべきことができた……だろ？　ろくなことじゃないだろうが、言ってみな。聞くだけは聞く」

クッキーを片手で割り、半分口に放り込む。同時に皿の上のクッキーがひとつ、同じように割れ、片方が消える。……なにを言うかは分かっていた。コイツが俺に最優先でやらせること、やらせたいことは決まっているからだ。



余りを、ゆっくりとかじる。それで、やはりゆっくりと、残りの分が消えていった。

そうして俺が口を動かし終えた時、高めのウィスパーボイスが夜の闇に響いた。

【私の欠片が、ひとつ見つかったのです。――それも、最も重要なものが】

◇

たき火のぱち、ぱち……という音が耳をくすぐる。俺はヤツから飛んできた予想通りの言葉――ただし、「最も重要なもの」というところ以外――を頭の中で反芻し、その後ルガイアの六箇所、欠け落ちた部分を見ながら、脚を組み直した。

そしてちいさく笑うと、言った。

「……それはめでたいことだな。ならスキップでもして、早く取りに行ったらどうだ」

【できればそうしたい。しかし現実的には、嫌みたらしい男に頼まなければならないのが、頭の痛いところなのですよ】

嫌みに嫌みで返す。いつも通りの光景。二年前に出会って以来変わらない。……欠片……。ずいぶんと間が空いたが、これでようやくみっつめということか……。

俺は下唇をかんで、少し黙る。その後、何度もうなずきながら、言った。

「……で。どこにあるんだその欠片は。仕事を断れと言うくらいだから、よっぽど手間のかかることだろうな」

【その前に。今さらですが、貴方は、貴方の目的を忘れてはいませんね？】

間を置かず、すばやく言葉が飛んでくる。俺は訝しげにルガイアを見やった。

「なぜそんなことを聞く。お前は、月が夜に出ることを忘れるのか」

馬鹿にしたように言ってから、皿へ手を伸ばし、新たなクッキーを、今度はひと口で食べた。それでもう一枚消える。

ルガイアはなにも動じず、淡々と、【無論、忘れてはいません。夕暮れよりも朝明けのほうが美しい、という真理と同じように】と返し、その自説に対する、俺の無関心具合を確認してから、再び言った。

【これは充分、意味のある質問です。……つまりこの件について詳細を話す前に、貴方の、目的に対する強い意志を再確認しておきたかった。ありていに言って、話をしたあと臆して逃げ出さないように、事前に言質を取りたいのですよ】

「逃げる？　――どこに、どうやって？」

俺はカップを乱暴に持ち上げてティオを流し込み、喉の甘みを緩和する。向かいのティオが一気に減ったあと、カップを置いた。

それからまっすぐ、黙るルガイアを見据え、「ちょうどいい。俺も、互いの目的について



おさらいしておく」と、早口でまくし立てる。

「いいか。俺には、お前の失われた力が必要だ。……世界中に散らばったお前の欠片を探し集め、元の姿とやらに戻せば、お前がかつて持っていた、アス・バルク、魔界、神界についての『重要な知』が復元される……という話が、大ボラでなければ、――それがな」

【ホラではありません。真実です】

鋭く言う。俺はうなずく代わりに、まばたきを一度だけし、話を続けた。

「いっぽうお前は、元に戻ることそのものが目的。しかし壊れてから幾星霜、俺が偶然手にするまで、山道に突き刺さったまま、自分では身動き取れない、人が近寄ろうともしないほど朽ちたお前は、欠片を集められるだろう人間を欲しても叶わなかった。まれに現れても取り合ってもらえず、取り合ってもらえても、応じてもらえなかった。……そりゃそうだ」

【……】

「いかにお前の話がほんとうで、その、現世を左右できるかもしれない情報を含む、『重要な知』が魅力的といえど――取り引きしたら呪われて、お前から離れられなくなる上、剣士なら他の剣を握れず……なにより、誰でも……」

俺は、口の端についたクッキーの残りをぬぐいながら、言葉を放った。

「……五年以内に見つけられなければ、死ぬと言うんだからな」

左胸にある、革の胸当てに軽く触れ、それを外す。そして上着を脱ぎ、その下のシャツも、ボタンをひとつずつ外してゆくと、肌をさらけ出した。

左胸には、赤い四桁の数字が刻まれている。これはルガイアと契約した瞬間に浮かび上がった、一日一日減ってゆく、非常に分かりやすい死へのカウントダウンだ。

ルガイアはさいしょ、八箇所欠けていた。それで二年間に集めた欠片はふたつ。……欠片にはそれぞれ、ルガイアが元々持っていた、戦闘に関する能力が宿っており、ヤツの説明によると、それなりにいいものらしいことは分かっている。今手に入れているふたつでも、使えば、戦いは以前より楽になり、欠片探しも滞りなく進むだろう。

だが、命を握られている相手の力を借りるなど、不愉快なので一切使用していない。ルガイアは不服そうだが、無視している。

ともかく、集めるペースとしては最悪……というのが現状だ。まあでも、世界中に散らばった、十に満たない剣の欠片を探すのだから、ふたつでも、よく見つけたものだとも言える。

探す手がかりは、「アス・バルクにある八大陸にひとつずつ」ということのみ。あとは、ルガイアが直に欠片と向き合い、その共鳴具合で判断する。俺には分からない。

欠片の気配は、かなり離れていても感じるらしいので、おおよその方向は分かる。今回の



仕事も、気配の範囲にマナラン王国が含まれていたから受けた……ということもある。

なんにせよ、俺ができることは、ルガイアを持って世界中を歩きまわることしかない。幸い、仕事が傭兵なので、それに不都合はないが、ふつうなら心が折れている。じっさい、そうなりかけたが、……そうもいかない事情があった。

【いい加減、呪いと形容するのはやめて下さい。ただの縛りですよ。やる気を出してもらうためのね】

ややムスッとした声で、のたまう。呪いという言葉の定義と、契約に対する心情は、互いの立場により相容れることはない。この件については、これ以上突っ込まないのが通例だった。

ちなみに、死ぬというのは、はったりではない。契約当初、ヤツの【証拠を見せましょう】のひと声で、一瞬、心臓に激痛が走り死にかけたからな。……くそったれ。思い出したくもない。

俺は肌をしまい、ため息をついて言った。

「……ま。そういうことだ。俺にはハナから選択の自由がないことくらい、分かりきっているだろう？　なんでもやるさ。馬鹿な心配はやめて、さっさと話すんだな。……それと、マナラン城には寄るぞ。断るなら、きちんと伝えておく必要がある」

皿に残った最後の一枚へ手を伸ばし、ふたつに割る。そしてひとつをルガイア側へ、もう

ひとつを俺のほうへ置いた。
ルガイアは、ちいさくため息をついたあと、しずかに言った。
【やはりよく分かっていないようですが、まあいいでしょう。……その欠片は、あるものの中にあるのです。貴方には、それを取り出してもらいたい】
淡々とした声が響く。俺は瞬いた。
「なんだそれは。まさか海底の、貝の中とでも言うんじゃないだろうな」
【見つけたのは、きょうです。私たちはきょう、海底散歩と洒落込みましたか?】
嫌みたっぷり、ルガイアは返す。【ま、貴方にとっては貝のほうが、はるかに容易かったでしょうが】
その言葉に、俺は眉をひそめた。
「俺が嫌がるようなこと、ということか」
【そうですね。しかし、仕事量自体は大したことありません。すぐに終わるでしょう】
「……ならマナランの任務と平行してできるじゃないか。なぜ断れと言う」
【それは不可能だからです。欠片を得れば、貴方がマナランへ行くことは生涯ない。マナランに親類縁者、友人知人がいるならば、実行前に会っておいて下さい】
俺は置いたカップを指で弾き、ややおおきな声で、返した。
「……いい加減にしろ！　はっきり言え！　なにをもったいぶっている……。俺はあらゆる



ことに覚悟など、とっくにあると言ってるだろう！」
【だから分かっていないと言うのです。覚悟は、貴方自身に訪れる不幸に関しては、でしょう?】
「……なんだと?」
ルガイアは、顔色が変わった俺を認めて嘲笑した。
【無料で幾度も剣を振るい、進んで人助けをする貴方に、罪もない人間を殺す覚悟はまだないはずです。……しかし、やってもらわねば困りますからね】
唇をかみ、瞬く。そして、苦々しい顔になる。
「……まさか。お前の……欠片は……」
ルガイアは抑揚なく言った。
【その通り。人の中です】

◇

俺は苦笑して頭をかき、ちん、とん、ちん、とん……、カップを爪で弾いたり叩いたり、いらつきを抑え切れず、ルガイアに対する負の感情を隠さないまま、返した。
「……きょう発見した。マナランをまたげない。とどのつまり……、……か」

ルガイアは、昼から雨が降るから雨具を持っていってね……、と母が子供に言うように、言葉を放った。

【察しがいいですね、アーク・リガード。……ま、そういうことで、あの女……。リリア・シャイナスを殺します。だから仕事は断って下さい】

# 第2章 ―正しい使い方―



夜が明けた頃、俺はマナランの森を抜けた。

仮眠すらせず、夜通し歩き続けたため、早い時間に広い空を拝むことができた。光を取り戻した世界は、眼下に広がるウェザーの街並みをあらわに映し出す。その奥には街を見おろすよう、白く荘厳なマナラン城がそびえ立っていた。

それを右手に、俺はゆっくり丘の小道をくだってゆく。マナランの朝は冷たい風の他に、小鳥たちの美しいさえずりと、そして幾度か愛らしい、小動物の走る姿を俺に示したが、およそただの音、風景として心を素通りしていった。

やがてウェザーの街に着くと、活動を始めたせわしい店通りをゆらりゆらり、人をさけて歩き、適当な宿を見つけた。そして、二階の部屋へ案内されるとすぐにベッドへ倒れ込み、俺は眠りに落ちた。

◇

【……ド。起きて下さい。アーク・リガード】
「……」
俺はゆっくり体位を変える。そして、ベッドに立てかけたルガイアを一瞥してから、カタカタと冷風で揺れる窓を見た。枠の向こうには、青い空が広がっていて、雲が気持ちよさそうに浮いている。
【もう昼を過ぎています。きょうはどうするんですか？　予定を話して欲しい】
返事をせず、引き続きぼんやり雲を見る。ルガイアは、ちいさなため息をつき、【まだ、だんまりですか……。例の話のあと、とつぜん歩き出してからずっとですよ】と、か細くウィスパーボイスを響かせた。
【ま、気持ちはどうあれ、ウェザーに出向いたことで、心が決まったのは分かっていますが……。手順を聞いておきたいのです。……貴方は以前、殺しの依頼は引き受けないと私に漏らしていた。つまりこれが初めてとなるわけですよね】
ちいさな虫が窓へ飛んできて、とまった。その後、虫は窓の上を、のろのろと歩き出す。
【昨夜、リリア・シャイナスは、『あすの晩、キミをマナラン王宮へと招待し、王より正式に仕事を依頼します』と言っていました。……激怒してはいましたが、任務であるから、なにを進言するにせよ、貴方と接触したことそのものは、王へ伝えているはずです。なら



雇うかどうかはおいて、ともかくマナランの者が、王の命で今頃、貴方を探してあの森や、ウェザーを歩きまわっている可能性もある。……それで、どうやるか】
「なにをだ」
寝たまま、虫を見ながら、答えた。それで頭の奥に、ほんのわずか、息をはくのが聞こえる。少し高くなった声で、ルガイアは続けた。
【リリア・シャイナスの、家を突き止めるには、です。今後彼女に起こることを考えると、マナランの関係者に尋ね、彼女に関心を持っていると思われるのは、よくありません。ゆえに彼らに接触せず、ばれないよう、独自に調べたほうがいい】
「……」
【それと、仕事を断るのは、家を把握してからにして下さい。断ったあと、ウェザーの街中やマナラン城周辺を探しまわるのは、不審がられる可能性がありますので。……ことを行う際、事前に家が分かっていれば、人目につきにくいルートをとり、夜に忍び込むこともできるでしょう。……さて。彼女はウェザーに住んでいるのか、マナラン城のどこかに部屋を与えられているのか。貴方はどこだと思いますか？】
「……。見当もつかん。王に会った時、聞いてみるよ」
【――はっ？】

ルガイアの、高い声が響いてくる。俺はゆっくりと体を起こし、おおあくびをする。
それから、ベッドに立てかけられたルガイアを横目で見て、その後、視線を外して言った。
「きょうの予定は？　と聞いたな。……そうだな。雑貨店でものぞいてみるか」
【……】
俺は、はきっぱなしのブーツを脱いで、ぺたぺた窓まで歩き、開けて身を乗り出す。向かいに見えるアパートのベランダで、女が洗濯物を干しており、その隣でシャツ一枚の幼い子が、木の棒をコンコン、柵に打ち付けていた。
下に目を移す。通りでは馬車がのんびりと進み、いっぽう、カーペットを両脇に抱え、大荷物を背負った行商人が、客に追われて逃げている。マナラン兵らしき剣士は、果物屋の軒先で親父と雑談をしながら、時折うまそうにリンゴをかじっていた。
「……と、いうよりまず飯と酒だな。うまい飯屋を探すとしよう」
【ちょっと、なんですか。……またつまらないジョークですか】
「ジョーク？　まさか。はっきりとした返事さ」
俺はゆっくり、窓枠についた手に体重をかける。みしり……と心地よい音がする。
そしてしばらくのち、返事を待つルガイアに、淡々と言った。
「欠片の件は保留だ。仕事は受ける。幾らか寝て、……今考えて。冷静になれたよ」



◇

俺は勢いよく窓を閉め、上着、シャツを脱いで肌をあらわにする。そうして、タオルを首に引っかけると、部屋の隅に置かれている水がめのフタを開けて、ひしゃくでごくごく水を飲む。そのあと、隣の桶に水を移して、顔を洗った。
【意味がよく、分かりませんが……。説明して下さい】
「……。シャイナスの住所は分からんが、職は分かっている。今、『光の術士団』を辞めるわけもないし、見失うことはない。ゆえに、急ぐ必要はないということさ」
俺は顔をぬぐい、そのまま、タオルを桶に浸してからしぼり、体を拭く。終わるとタオルを畳んで、桶の端に引っかけた。
「仕事は受け、マナランと関わることで、シャイナスとも自然に関わり、その間、殺さずに取り出す方法を考える。……極めて単純な答えだろ？」
そこでノックの音がした。俺は革鞄から新たなシャツを取り出し、手早く着たあと、返事をする。エプロンをまとった若い女が入ってきた。
食事はどうします、旦那、と聞く彼女に、俺はかぶりを振り、「ウェザーは初めてなので、街の見物がてら外で食べてきます。いいところがあれば教えてくれませんか？　できれば、外にもテーブルがあるのがいい」と尋ねた。すると望みの店について、地図まで書いてくれた。

「どうもありがとう。それと、ベッドの上に洗濯物を置いておくので、頼みます」
その後、少しやり取りしたあと、彼女は出て行った。……が、ドアが閉まった瞬間、案の定、頭の奥に、やや怒気を含んだウィスパーボイスが響いてきた。
【……いい食事と酒を味わう前に、私の説明を聞いてもらいましょうか。どうもことの深刻さを、理解していないようですからね】
俺は黙ってブーツをはき、古いシャツを畳んでベッドの上へ置き直す。ルガイアは明らかにいらいらしていたが、欠片に関しては過去二度とも、こんな感じだったので、俺はなにも気にしない。
ルガイアはわざとらしくため息をつくと、つんつん話し始めた。
【確かにリリア・シャイナスの職業からして、どこかへふらりと消えてしまうこともなければ、任務でマナランを離れたとしても、所在を突き止めるのも容易でしょう。性格も真面目そうだったし。読めない行動をするタイプの人間ではありません。そこは百歩譲れないこともない。……しかし、殺さないで取り出すのは、無理なのです】
「なぜだ」
【欠片は、心臓の中にあるからです。はっきり捉えました】
「……。ふーん」
俺はベッドの傍にある鏡台に置いてあるクシで、髪をとかす。舌打ちが響いてきた。



【……どうやって生かしたまま取り出すのですか!?　『重要な知』を失ったとはいえ、私は貴方よりはるかに長生きし、世界についての知識はある。その上で言いますが、医術をはじめ、いかなる術、技をもってしても不可能です。……絶対に】
「ルガイア。いいことを教えてやろう。今までは黙っていたことだ」
俺はクシを置いて、ベッドから立ち上がり、上着、そしてマントを引っかける。その後ルガイアを背に負って、ドアノブをまわしながら、言った。
「飯も酒もな、青空の下で飲み食いすると、うまさが二倍増しになる」
【……アーク・リガードッ!】
怒声に顔をしかめつつ、俺は部屋を出て行った。

◇

地図を片手にしばらく歩くと、家や店が建ち並ぶ本通りを離れ、小道へ進み、景色が開けた。道の左右には幾つもの畑と、ぽつりぽつり家が建っている。
歩く間、ずっとルガイアは、【不可能なのに】【なにも考えていない】【アーク・現実感覚ゼロ・リガード】など文句を並べていたが、すべていなして先へ行く。やがて遠くに、なだらかな丘の上に立つ、赤い三角屋根の店が見えてきた。

「外にテーブル……もあるか。見晴らしもいい。まだ寒いから、外には客もいないときてる。……最高だな」

ひとり、明るく言うも無視される。俺はため息をつき、続けた。

「お前は俺の言うことを、非現実的だと批判するが、俺だって考えもなしに決めたわけじゃない」

【へー。ふーん。そうですか】

……たまにガキっぽいんだよな。言ったらキレるから黙っておくが。

「……。よく考えろ。アイツはぴんぴんしてただろうが。それに、欠片が心臓外に押し流されることもなく、留まり続けているのも含め、なんらかの……というか、お前の超常的な力が働いているからだろう」

【……私の？】

足を止めてルガイアを見やり、うなずく。風が、すすけたマントをたなびかせた。

「これは俺の仮説だが、アイツが白竜（ホワイトドラゴン）や飛竜（フライドラゴン）を創り出せているのも、欠片の力が神力（しんりょく）に作用したせいだと思っている。……神術（しんじゅつ）は何回か見ているし、伝聞や本のも含めると、わりと知識はある。しかし生物を創造するなんて話は、聞いたことがない。アイツ自身も、家系で初めてのことだと言っていたし。……お前はどうだ。聞いたことはあるか」

【……】



遠くの雲をぼんやり見て、言った。

「お前は、『重要な知（インテリジェンス）』だけでなく、八つの欠片を失ったことで、世界については博識でも、当の自分のことや、色々な能力を忘れている。今、欠片はふたつ戻ったが、戻るたび、幾らか思い出したことがあると言ってたろう。……だからシャイナス以外の欠片を集めたら、またなにか思い出すこともあるかもしれん。……そんなところだ」

【あとまわしにする、ということですか。他の欠片から得られる情報を期待して】

「最善の方法を探し出すため、乱暴なそれを保留する――と言ってくれ。欠片集め以外でも探すよ。……ともかく戦い以外で、人殺しなどしない。俺は殺人者じゃない。傭兵（マーセナリー）で、それ以前に……――剣士だ」

息をはき、また歩き出す。ルガイアはなにやらぶつぶつ言っていたが、俺を責める感じではなく、考えをまとめているようだった。……願わくば飯の時にまとまって、話し出さないで欲しいものだ、が……。

「……？　なんだ……」

俺は、自分の脚を凝視する。……動かない！

【どうしました？　様子が……】

俺は顔をしかめつつ、鞘（さや）ヒモをたぐり寄せ、柄（つか）を顔の横に出すと、ルガイアを引き抜いた。

そして、嫌な汗をかきながら、返した。
「……どうやら術にはまったようだ。腰から下が反応しない。感覚は、ある……」
俺は左右を見まわすが、人は見当たらない。それでルガイアに聞く。
「後ろはどうだ……誰かいるか！」
【いえ……。――アーク・リガード！】
声が響いた瞬間、俺は頭上に殺気を感じ、とっさにのけぞる。すると、鈍い音とともに、俺の足もとに大穴があき、土が弾け飛んだ。
「――小放！」
刹那、俺の右目は青白く光り、その輝きはルガイアを含めて、薄い膜として全身を包み込む。……動……かないか！　どうする、もう一段……――いや……！
俺は顔を上げ、土をえぐった主である、はるか頭上に浮かぶ白マントに白フードの人間を認めると、そいつが手をかざすのと同時に、ルガイアを高く突き上げた。
「……流殺光！」
ルガイアを包む光は、粒となって剣先に集中、そのまま高速で飛び出した。無数の粒がフード人間めがけて飛んでゆく。が、ひらりとかわし、また手をかざしてこちらへ向ける。それで俺はおおきく息をはくと、ルガイアを思いきり振りかぶり、地面に叩きつけ、自分の体を反動で畑へ吹っ飛ばした。



土にめりこみ、まみれて、動く上半身を起こすと、元いた道の地面が爆発していた。再び顔を上げると、フード野郎は依然ぷかぷか浮かんだまま、両手におおきな白い光をたくわえ始めた。……そうかよ。ならコイツをくれてやる！
「……半放！」
俺はあおむけになって、叫んだ。両眼が青白く光り、全身の、輝く膜が厚くなり、不規則な点滅を繰り返す。その煌々と光を放つルガイアの照準を、フード野郎に合わせ、怒鳴った。
「……大流殺光!!」
全身の光がルガイアに収束、剣先に集まると、巨大な球となって飛び出した。フード野郎はまたもやかわそうと右に動くが、球は手前で四散し衣を滅多撃ちにした。
果たして数秒とかからず、白い衣は穴だらけになり、一瞬止まったあと、畑に落下し、土と埃を辺りにまき散らした。

◇

俺はゆっくり、右脚、左脚と力を入れて、動くようになったのを確認、そしてすぐ立ち上がり、口に入った土をはき出すと、深呼吸した。
「……なんなんだ。マナランで狙われるいわれはないぞ」

【ひょっとして、リリア・シャイナスを殺すという、我々の計画が漏れていたのでしょうか】
「それはお前の計画だ。俺もまぜるな」
ため息をついて、土を踏み、一歩ずつ、ぼろぼろになった白い布の塊に近づく。……殺気はない。
「小放（アーヴィン）」
輝く膜を薄くする。まだ解除するには早い。もう少し観察してからでないと……。
「あれで半放（ルーフィアス）とは……。とんでもない魔汐（ましお）だな」

ふいに声が発せられ、俺はルガイアを落としそうになる。そして、訝（いぶか）しげに白い布を見やると、それはもごもごと動いてから、半分起き上がり、顔を出した。
「よお、千魔斬（サウザンド）。いや……。変態千魔斬（えろえろサウザンド）か」
俺は顔をしかめた。顔中、しわと古傷だらけの老人は、にやりとする。それから、よいしょっと……と立ち上がり、乱れた長めの白髪を後ろになでつけると、ぼろきれになったマントとフードを脱ぎ捨てた。
小柄な、あらわになった全身は、簡素な服の上を白い光……神力が包んでいる。よく見ると、幾つもの古代神語（こだいしんご）で術式が刻み込まれていた。……結界か。しかも、相当強力なものだ。
「危うく死ぬところだったわ。お前、容赦ないの。というか、めちゃキレとったし。気ぃ



短っ」
ひょっほっほ、と指差して笑う。俺はいらいらしながらも、ルガイアを収めて光を消し、深呼吸した。
「殺されかけたのは、こっちですから。……いったいなんのつもりですか」
「試験その二、と言えば分かるか？　白竜（ホワイトドラゴン）を倒したのは見事だが、ありゃ、試合みたいなもんだからな。より実戦的なやり方で、試したわけだ」
「乱暴な試験ですね。……三度目はご免こうむりたい」
俺は息をはき、何度かうなずくと、言った。
「あなたは、『光の術士団（ライトネス）』の方ですね。今の言葉……」
「いいや。あんなめんどくさいもんに入るかよ。まあ、創ったのはわしだがな。タンドラーがくそ真面目でなあ。息苦しいったらないわ」
そう言って、体をぱん、ぱん、と叩くと光を消す。術式も消えた。……創る？　タンドラー？　……おい……。まさか……。
俺は苦笑いして、一歩下がると、ちいさくかぶりを振って、尋ねた。
「もしや……、マナラン王、ライアー・ドルヴィン五世……という、ことは……」
「そうよ」
あっさりうなずいた。俺は血の気が引き、慌（あわ）てて、片ヒザをつき頭を下げた。

「――こ、これはとんだご無礼をっ！　身を守るためとはいえ、まかり間違えば命を奪う結果に……！」
「そうかものう。どうしようかのう。しょっぴこうかのう」
「……！」
さ、最悪だ……。ルガイア以前に、死刑であの世に行くことになる……！
「なんてな。うっそぴょーん。そんなちっせーことするかよ。けらけらけら」

【アーク・リガード。この老人は、きっとマナラン王を騙るただの阿呆です。消しましょう】
「馬鹿なことを言うな！　……本物だったらどうする！」
小声で言い返す。すると自称・マナラン王が、「んん～？」とのぞき込んできて、「さっきもぶつぶつ、なにかひとりで言っておったが。……もしかしてお前、淋しいのか？　よしよし、わしが友達になってやろう」と、手を差し出してくる。俺は顔をしかめた。
「話し相手は間に合っておりますゆえ！　……それに私の魔汐でしびれますよ！」
「リリアもそうしたろう？　わしがそのように教育したからな」
「……」
王は、笑っている。俺は、そんな顔と、古傷に満ちたやせた手を少し見たあと……、しずかに自分のそれを重ねた。



「っと、ちちち……。いい魔汐だ。……しかし魔剣士のくせに、使っていた技が聖剣士のもんなんだよなあ。しかもあのえげつないのは……。師はレオ・ガーヴァンか」
「……ご存じなのですか」
驚いて、返す。すると王は、「ああ。前に飯を食うだけ食って、『やっぱり仕事は、お引き受けできません！　――ぐっない！』ってとんずらされたからな。あの野郎……」
神力と、握る力を強くする。――いたたた！　それは俺のせいじゃない！
「まさか弟子だったとは思わなかったが、これも縁というヤツか。……ま。そういうことで、お前さんには、師匠のツケを払う意味でも、この仕事は引き受けてもらわねばな。――アーク・リガード」
手を離し、王は真顔になる。そして、しびれで顔をしかめている俺をまっすぐ見据え、言葉を放った。
「お主を、宝獣・三眼竜を討つ任に命ずる。……千魔斬の名をもって、見事ヤツを倒し、不死の力を持つという三番目の目を取ってくるのだ」

◇

「三眼竜？　……まさか」
「お前、二週間前はシージールにいたのだよな。……そこまで噂は届いてないか」
王は空を見上げ、話し始めた。
「ひと月ほど前。この辺りの空を三眼竜が飛んでいた……という情報があったのだ。宝獣を見たという話は、年に何回か報告されているが、今回は見た数が多く、日時が重なっている。信憑性が高い。……それに隣国のフォーズでも、違う日時に目撃されたという情報が耳に入っている。フォーズの王はがめついからな。もう動き出していることだろう」
言い終えて、視線を俺に戻す。……宝獣とは、アス・バルク、魔界、そして神界の、どこにもその身を留めないとされている、様々な奇跡を備えた伝説の獣である。もちろん名くらいは、知っているが……。
「……その顔は、信じていないという感じだな」
「……子供の頃、絵本で読んだことはあります。しかし、あまりに自分の日常とかけ離れていて、すぐにしっくりとはいきません」
「そうか。しかし、見返りは現実的だぞ」
王は、にやりと笑い、ポケットからなにかを抜き、俺に差し出した。
「見事討ち取ったあかつきには、望む褒美を与えよう。経費もすべて負担する。……ファナ大陸の国ならば、これを銀行に持っていけば、要るだけ金を都合することができる」



ちいさな銀の板には、双竜の刻印、そして、「マナトゥン」と現代神語で書かれている。マナラン王国が発行している、一年期限の金保証券だ。
「遊行に使ってもいい。必要ならば不動産の購入も許す。……だからその間、他の仕事は断ってくれよ」
「……。分かりました。お引き受け致します。身に余る処遇に感謝を」
俺は片ヒザをつき、頭を下げる。それから立ち上がって土を払うと、王から券を受け取った。
「よしよし。……実はこの話には、まだ続きがあっての。それは飯を食べながら話す。あとそのマントを貸してくれ。もうすぐだが念のためだ。目立つからな」

◇

向かったのは、かの赤い三角屋根の店だった。俺は王に速さと歩調を合わせながら、その少し後ろを歩く。
「ところで、いつから私のことを？　ひょっとして森からですか」
マントに身を包んだ王は、前を見たまま、「いいや」と返す。
「昨夜、リリアから話を聞いたあと、ウェザー中の宿屋に、お前が来たら知らせるよう、

言いつけておったのだ。……アイツはお前に、宿を教えなかっただろう？」
「はあ……」
昨夜のことを思い出して、苦笑する。王はちいさく笑みをこぼすと、続けた。
「宿へは、お前の、こちらでの行動を追わせるため、わし直属の神術士をやった。お前に地図を書いてやったのは、そいつだ」
と、少し離れた畑の端に建っている小屋を指差すが、その陰に女がいてぎょっとする。……まったく神力も、気配も感じなかった。さすがは王の直属ということか。
王が手を振ると、女は一瞬で姿を消した。
「あの小屋で、わしはひとり待っておったのよ。世界最強の男が来るのをな。正直、試験というのは方便だな。手合わせをしてみたかったのだ。戦士としてはうずくだろう？　……結果は、さすがは千魔斬という感じだったがな」
俺の胸を、小突いて笑う。俺は、頬をかいたあと、尋ねた。
「しかし、私は自分の行きたい店を彼女に尋ねたのですが。なぜその近くに？」
「それはお前が、ちょうどいい条件の店を指定したから、予定を早めたというだけだ。仕事を受けるにしろ断るにしろ、晩には城へ出向くだろうから、その時誘導する手はずだった。……ちなみに、小屋には、朝からずっといたわけではないぞ。連絡を受けたのち、身代わりを立てて城から飛んできた。あまり城を長く空けると……というか、このことがばれる



と、大臣のヴェンガとか、術士長のタンドラーがうるさいからな。……着いたぞ」
王の言葉で足を止める。低い柵の向こう、一階建て、赤い三角屋根の店は、そのちょこんと突き出た煙突をはじめ、こぢんまりとした佇まいが、なんとも愛らしかった。
外には白いテーブルに、イスが三脚。ベンチもある。おまけに、やや離れたところに生えた木には、ブランコまで吊っていた。なんか童話に出てくるような店だが、子供もよく来るのかな。酒は、置いてあるのだろうか。……しかし、看板が見当たらないのは……。
きょろきょろする俺を尻目に、王はマントを脱ぐと、白いドアへ近づき、ノックした。
「わしだ。……いるか？」
「……。はい。少々お待ち下さい」
ほどなくしてドアが開き、女が出てくる。……が、それは銀髪、銀眼の……リリア・シャイナスだった。

◇

「な……。……なっ……！」
シャイナスは、俺の姿を認めた瞬間硬直し、ぷるぷると震え出す。……薄青色の、フリルがたくさんついた、ヒザ丈ワンピースに青い靴。セミロングの髪には、カチューシャをつけ

ている。俺はそんな、絵本から飛び出してきたような装いの女から目をそらし、王へ話しかけようとした。……が。

「――っ!? いっ、今馬鹿にしたでしょう!? 私の服！ ……許せない！ 王、成敗の許可を！」

「――ちょ……待て！ なにを勘違いしている！ 俺は王に……」

慌てて叫んだ。が、両手を白く光らせて、じり……じりとこちらへ寄ってきた。……おいおいおい！

「やめんか！ お前に話があってきたのだ……術を収めよ！」

王に一喝され、「も、申し訳ございません！」と、シャイナスは光を消し、ヒザをついて頭を下げる。俺は息をはいた。

「いったいどういうことですか。ここは、シャイナスの家ではないのですか」

「『外』で、『飯』が食えて、『酒』が飲めるところなら、よいであろう？ ……リリア、サンドイッチを用意せよ。それとミーミールだ」

「か、かしこまりました……」

シャイナスは立ち上がり、ヒザの土を払うと俺を睨みつけ、中へ戻る。王はテーブルにつき、俺にも座るよう促したので、ルガイアを下に置き、従った。

王は、俺がきちんと腰掛けたのを見届けると、ちいさく息をはき、言った。

「アーク・リガード。話というのはだな、くだんの旅には、アイツも同行させて欲しいのだ」



「……」

俺は絶句する。わずかに首を振ってから、ようやく言葉を放った。

「仰る意味がよく、分かりませんが……。もしかして目付役ということですか？ それなら他にも……」

「みーんな忙しくての。それにアイツは、生まれてから一度もマナランを出たことがない。さらにはタンドラーが化石脳ゆえ、実践経験に乏しい。戦いの経験を積ませ、広い世界を見させておきたいのだ」

王は、しずかに続けた。

「リリアは白竜をはじめ、生物を創り出す希有な才能を持っている。それだけでなく、神力の質も量も、幼い頃から傑出していた。だからこそ、この道を勧めたわけだが……。実は術士学校へやったのも、『光の術士団』へ入れたのも、術士長であり、父親のタンドラーではなく、わしだ。……ヤツは、女は十五で嫁に行き、家を守るのが務めで幸せだという男だからの。跡継ぎもいるし、リリアが術士の道へ進む必要はない！ と猛反対しよった。……色々大変だったわ」

そこでシャイナスが、サンドイッチと酒……ミーミールを持って戻ってきた。ミーミールは、有名なマナランの地酒である。

シャイナスは、よどみない所作で、王の前へサンドイッチの載った皿と、グラスを音もな

く並べる。俺にも、きつい視線を飛ばしつつ、黙って同じようにする。そしてミーミールを注ぎ、「失礼」と言って、王と俺のヒザに、ナプキンを広げた。

ミーミールの瓶を置いたあと、シャイナスは、「それではごゆっくり。王は（ぼそり）」と戻ろうとするも、王に制された。

「待て。お前に話があると言っただろう。座りなさい」

「……はい」

シャイナスは、渋々俺たちの間へ腰をおろす。王のほうへイスを寄せていた。……。

「……ところで王。昨夜の件については、極めて詳細に、客観的な事実をご報告したはずですが。……なぜ彼がここに？」

「そりゃあお前、マナランの術士や剣士どもが誰ひとり勝てなかった、白竜を倒した男だぞ？　雇うに決まっているだろう。人格とか言うなよ……野暮だ」

「う……」

シャイナスは押し黙る。王はサンドイッチをかじり始めた。その間をもたせるようなやり方に、シャイナスは、いらいらして足を踏み鳴らす。……いっぽう俺は、いらいらどころではなくなるような言葉が、もうすぐ王の口から出てくるのをおそれ、なににも口をつけず、うつむき、事態に備えていた。

そんな胸中露知らず、ほどなくして王は、手をぱん、ぱん……払うと、言った。



「さて、リリア・シャイナス。お主を、きょうこの場をもって、三眼竜を討つ役に任ずる。明朝より、アーク・リガードとともに、マナラン王国を発つのだ」

「……。はっ？」

果たしてシャイナスは目を見開いた。まるで、家に帰ったらブタが勝手にパーティを開いてたんだけど、これはなに？　というような顔……。強ばったまま、震える指で、俺と王を交互に示す。

「……だ、だって任はそこの男に……。……えっ？」

「わしは元々、お前も一緒に行かせるつもりだった。だからお前が、リガードを試す役に名乗り出たのを、反対するタンドラーを制して許したのだ。……というか、名乗り出たのだから、コイツに興味があるのだろう？」

「そっ！　そそそそれは……！　――ともかく今はないです！　ないんですっ！」

ぶんぶん手を振って、否定する。そして、なにか続けようとしたが、王が自分を無視して酒を飲み始めたので、口を閉じる。……目はきょろきょろとして定まらず、歯をがちがち鳴らし、下では土をがっ、がっ……靴でえぐっていた。……俺は嫌な予感がして、グラスと皿を持つと、足でイスを動かし、シャイナスから身を離す。――すると。

「……す、……です、……――絶・対・にっ！　いやあああああああああああああ

あああああああああああああああああああああああああああああああ――ですっ!!」

ブランコがおおきく揺れる。コ、コイツ……声にまで神力が含まれるのかよ！

「これはマナラン王としての命である。……逆らうことは許さん！」

怒鳴りつけられ、シャイナスは、「だ、だって、だって……」と子供のように半泣きになり訴える。そんな様子を尻目に、俺は神力でしびれつつ、香りにつられて、ミーミルをひと口飲んでみた。……うまい。

次の瞬間、魔獣のような形相のシャイナスが、俺からグラスと皿を奪い取って立ち上がり、家の中へ駆け込んだ。がっちゃんがっちゃん暴れる音が響いてくる。俺は頭をかいた。

「あの……。あれほど嫌がっているわけですし。ご再考願えませんか？」

「わしがお遊びで、お前に金保証券を渡したと思っているのか？　……まあ見ていろ。アイツはもう、ガキではない」

やがてぎい……と音がして、シャイナスが戻ってきた。顔は青いような赤いような……、なんともひどい有様だった。……大丈夫か。

俺の心配をよそに、シャイナスは、あくまで冷静に、王へ言葉を放った。

「……失礼致しました、王。あまりにとつぜん、耳を疑うことを仰ったものですから、わたくし、少々動揺してしまいまちて……」

棒読みで、しかもかんだ。まだ動揺は続いていた。



「もちろん先ほどのは、いつもの、王特有のお寒いジョークですよね？　いかに王宮で受けが悪いからといって、わざわざ私のところまでお訪ねになり、ご披露なさるなんて……」

「――馬鹿者！　わしのギャグは受けとるわっ！」

マジギレしていた。そっちかよ！

怒声の恐怖で縮こまるシャイナスに、王は、「よいか？　あれは三年前、サーンの誕生パーティでのことだった。わしは」と、長話を始めようとしたので、俺は咳払いする。それで王は気まずそうに口をつぐみ、それからまた、言葉をつむいだ。

「……ともかく。これは国のためでもあるし、お前のためでもある。……確かにお前の、神術の才はマナラン一だ。しかし神術を扱っての、じっさいの戦闘や、その他あれこれ神術士としての腕前は、まだまだひよっこである。このままここにいれば、タンドラーはお前に任を与えないし、いつまで経っても一人前にはなれないぞ」

「は、はい……」

ヒザをつき、うなだれる。そのまま王の話を黙って聞いていた。

やがて話が、いち段落つくと、シャイナスは顔を上げ、王を見つめると、言った。

「……分かりました。拝命致します。……ただ、ひとつだけお約束下さい」

「なんだ」

シャイナスは、しずかに続ける。
「これから私のすることを黙認する……、と」
「……。よく分からんが、よかろう。それくらいは譲歩しよう」
その言葉を聞き、一瞬シャイナスは口の端を上げる。が、すぐに真顔に戻り、立ち上がると、すたすた中へ戻っていく。王は、ため息をついた。
「タンドラーもくそ真面目で頑固だが、アイツも負けてないわ。……結婚話も、幾つか持っていくたび、「嫌です!」のひとことではねつけおるし。わしは神術士の道を勧めたが、家庭を持つなとは、ひとことも言っていないのに。……はあ」
ヒジをつき、暗い顔で目をつむる。ちいさな頃から目をかけているみたいだし、王にとっては、孫のような感じなのだろうな。
俺はふと、長く離れて暮らす、故郷の父母を思い出す。……が、その刹那、ある画までも浮かんできてしまい、頭に痛みが走り、唇をかむ。
しかし、すぐにドアが開いてシャイナスが戻ってきたので、俺は必死に画を頭から追い出し、平静になった。

「お待たせ致しました。……王。約束、お忘れなく」
王は目も開けずに、おう、と返す。シャイナスはそれを見届けて、今度は俺に向き直り、



さっさと歩みよってきた。そうして、ぐっと身を寄せる。
「アーク・リガード。……失礼」
「……⁉」
シャイナスは俺の首に、なにかを取りつけた。細い指と、垂れた髪がわずかに触れ、ぴりりとしびれた俺は目を閉じてしまう。開けた時にはもう、シャイナスは身を離していた。
俺は訝しげにシャイナスを見やりつつ、首に手をやる。……硬い……金属。……首輪か。
「どういうつもりだ。俺はあまり、こういうものは身につけない主義なんだが……」
「そう？　……でもたまには、いいかもよ」
シャイナスは、少し笑うとワンピースのポケットに手を入れて、取り出したものを自分の首につける。……銀色の首輪。もしかして、俺のと同じものか？
怪訝な面持ちでいると、王が、ゆっくりと目を開き俺たちを見る。すると顔を強ばらせた。
「……？　お、おい、お前……！　それは……」
「――王。約束です」
強く言うシャイナスに、王は、ぐ……、いや、しかし……と言葉を濁す。俺はそんなふたりを交互に見て、尋ねた。
「なんなんだ、いったい。お前は俺が嫌いなんだろう？　どうしてこんな、揃いのようなものを……」

「ええ、嫌っているからつけたのよ。――アーク・リガードッ！」
シャイナスは右手を突き出し、人差し指と小指だけを立てて、「うさぎ」の形を作ると、とつぜん、
「……ヒャンテ！」
と、叫んだ。

◇

「……⁉　なっ……！　……がっ……！」
次の瞬間、俺の全身が硬直し、動けなくなる。呼吸と、わずかに目は動く、が……。……なんだこれは⁉
目玉を動かし、シャイナスを捉える。……首輪が白く光っている。俺はすぐ、目玉を下へ移動させ、自分のそれからも光が漏れていることを認めた。……ま、まさか……。
「……これはね。アーフィルという、神族と、その血を引く人間の家に代々伝わる、婚神具なの。生涯を誓ったふたりが、互いを想い、神力を送り合うための道具。怪我や病気で低下した体力を、神力で癒し合う……という仕組みよ」

淡々と述べ、「ちなみに、送るのをやめる時は、こう」と、指を鳴らす。それで光は消え、俺は体に自由が戻り、思わずテーブルに手をついた。

そして、顔をひきつらせて笑い、俺はシャイナスへ、ゆっくり言葉を放った。

「……つまり、魔族の血を引く俺にとっては、金縛り装置以外のなにものでもない、と。そういうことか。……とうぜん、外せもしないんだよな？」

両手で思いきり首輪を引き、むなしくそのさまを確認する。シャイナスは、うなずいた。

「そう。神術で鍵がかかってるから。一緒に旅をするならば、……みっ、操を守るため！ これくらいのことはしておかないとね！ 乙女として、とうぜんの処置だわ！」

「……。なるほどな。まあ、びりびりしびれるより、幾分いいよ……」

精いっぱいの嫌みを返す。それから、つーんと横を向くシャイナスに舌打ちしてから、気まずそうにグラスを傾ける王に、俺は詰め寄った。

「結婚の道具をこんなふうに使う女を、私は見たことないのですが……。半ば育ての親である立場として、なにか、仰りたいことはないのですか!?」

「ふっ、普段はいい子なのだ！ ……普段は」

俺がさらに寄ると、王は咳払いして、「これリリア！ お前はなにを考えている！ そもそも相手が現れた時、どうする……替えはないのだぞ!?」

「ご・心・配・な・く。とうぶんそんな予定はありませんから！ あといい機会なので申し



上げますが、今後もう、そのお世話は、おやめになって下さ・い・ねっ!!」

「わ、分かった……」

悪魔に睨まれたカエルのように、王は首肯した。どうも大事以外は、孫のようでもあるので、強く出られないようだった。

まくし立てるシャイナスをよそに、俺はヒジをつき、足もとのルガイアに目をやる。すると、ちいさく息をはく音、次に呆れたようなウィスパーボイスが、頭の奥に響いてきた。

【だから、私の言うことに応じればよかったのに……。貴方はつくづく、茨の道を進むのが好きですね、アーク・リガード。……哀れな男】

「……くそ」

力なく悪態をつき、俺はミーミールの瓶を指で弾いた。

## 続きは「天壌穿つ神魔の剣」本編で！